

登壇協力社員の声

～理系向けキャリア教育「しごとーく」登壇者～

プロジェクト概要

「高専」「大学の理系学部」に所属する学生に対して、技術者として使える技術・知見を提供する機会は十分にあるものの、技術者の実際の仕事内容や仕事を通じて感じるやりがいなどのイメージを具体化する機会が学校だけでは用意できないという課題から、学校と連携し、製造業の現場エンジニアを派遣し「ご自身のキャリア」をプレゼンしてもらう。

プロジェクトの流れ

事前研修

採用現場で使われる初見の方にわかりやすく伝えるノウハウを伝達。実際に話してもらうなど、実践的なトレーニングを実施。FBには他社の部課長も参加。



イベント登壇（複数回）

当日は複数名の社員が順番にご自身のキャリアに関するプレゼンを実施。プレゼン後は座談会やパネルディスカッションなどで学生が抱く疑問に回答。



—事前研修はいかがでしたか？

事前研修では、プレゼンテーションにおいて重要となる「入社動機」や「印象に残ったエピソード」をテーマに、効果的な伝え方についてレクチャーを受けました。特に印象的だったのは、「入社動機」の深掘りです。正直に言えば、就職活動の際は感覚的に今の会社を選んだ部分があり、人に説明できるような合理的な理由はあまり持っていませんでした。しかし、他社の方から「〇〇の道は考えなかったのか？」と、これまで意識してこなかった視点で問いかける中で、自分の中にあつた感覚的な選択理由が徐々に言語化されていきました。その結果、なぜ今の会社や職種を選んだのかが自分自身の中でクリアになり、大きな気づきを得ることができました。

—イベントに登壇してみたいかがでしたか？

登壇者の中でも少数派である「研究職」という立場で、さらに登壇が多かった高専では研究職があまり就職先として選ばれない傾向があるため、自分の仕事を理解してもらうことには苦労しました。ただし、アンケートのコメントを参考にしながら毎回内容を調整し、試行

錯誤を重ねる中で、3回目の登壇では学生から「高田さんの話を聞いて、将来研究職になりたいと思いました」と声をかけてもらうことができました。その瞬間は非常に嬉しく感じるとともに、このプロジェクトに参加した意味を強く実感することができました。

—プロジェクトを通じて、良かったと感じられる点はどのような点ですか？

プロジェクトを通じて大きく変わったのは、採用活動における学生との関わり方だと感じています。ちょうどプロジェクトへの参加後にインターンの受け入れを経験したのですが、前提知識のない学生に対して、どのように魅力を伝えるかを深く考えてきたことで、実際の採用活動でもその経験を活かすことができ、貢献できているという実感を持つことができました。しかし、それ以上に得られた大きなものは、この活動を通して自分自身が今の仕事の意味や意義を改めて見つめ直すことができ、その結果としてモチベーション高く日々の業務に向き合えているという点です。これは私にとって、非常に大きな成果でした。



高田 裕亮 さん
日立製作所 2022年入社

入社動機を思い出すことで、自分自身の仕事の意味・意義を再認識しました

—事前研修はいかがでしたか？

これまでも採用活動の場で学生と話す機会はありませんでしたが、事前研修で教えていただいたプレゼンのテクニックは非常に勉強になることばかりでした。特に印象的だったのは、「就職活動をしていない学生」に対して話す際の配慮の重要性です。こうした学生は、企業や仕事に対する前提知識がまったくないため、どのように伝えるかを一層工夫する必要があります。これまで自分が無意識に前提としていた情報も、丁寧に噛み砕いて伝える必要があるということを知り、初回の研修ではその点に非常に驚かされました。

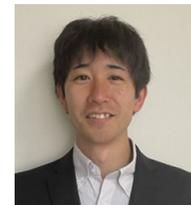
—イベントに登壇してみたいかがでしたか？

就職活動をしていない学生は、良くも悪くも非常に正直で、興味のない話には素直に反応しないと感じました。実際、自分自身のキャリアについてプレゼンをしていても、その場ではあまり反応が得られず、プレゼン中は不安を感じることもありました。しかし、イベント後に回収したアンケートでは、びっしりと感想を書いてくれている学生も多く、しっかり伝わっていたことに大きな喜びを感じました。さらに、そのコメントを次回の登壇に活かして話す内容や伝え方を工夫すると、学生の反応が明らかに変わってきた実感があり、

自分のプレゼン力を高める上でも非常に有意義な経験となりました。

—プロジェクトを通じて、良かったと感じられる点はどのような点ですか？

最も大きな変化は、若手との関わり方だと思います。自分も入社当初は右も左も分からず、不安な気持ちでいっぱいだったことを思い出しますが、職場に慣れるにつれ、いつの間にかその気持ちを忘れていたように思います。一方で、新人の方々も「分かっていない」と思われたくない気持ちから、なかなか弱音を表に出せないことがあります。今回、忸度のない学生たちと接する中で、「仕事なんて最初は誰も分からない」という前提を持つことの大切さを改めて実感しました。その意識を持って若手と向き合うことで、関係性がより丁寧で近しいものになったと感じています。今後、自分自身がチームのリーダーとして若手を牽引していく立場になっていく中で、この経験は非常に貴重で、間違いなく今後に活かせるものだと感じています。この経験は本当に良かったと感じています。



若林 佑一 さん
日立インダストリアル
プロダクツ 2016年入社

忸度のない学生の
実態に触れ職場での
若手との関係性創りに
活かされました

COLUMN

当協会が主催するプロジェクト(青田創り)の登壇によって得られる社員の意欲醸成効果

▶ 当協会が主催するプロジェクト(青田創り)へ登壇いただく社員の方に対してプロジェクト参加前後での労働意欲醸成効果を、早稲田の社会学の教授と調査をしています。

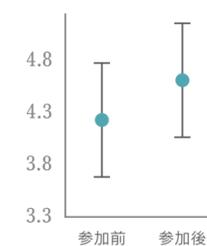
調査方法は、対象のプロジェクトの前後で同一のアンケート回答いただき、労働意欲の変化を調査しています。2024年度からの調査開始の関係で、学会提出するにはまだサンプル数が不足している状態ではありますが、結果としては右記のような変化がみられました。

体験談にもありますように、ご自身のキャリアや、入社動機を改めて振り返ることで、ご自身のキャリアのゴールが具体化されそこに向けて、今自分の歩みが確かにゴールに近づいているという実感を持つ機会になっているのだと推測しています。

12項目の質問項目の内、下記2項目で優位な変化の差が見られました。

Q1

これまで経験してきた仕事は私のキャリアのゴールと職業上の成長に意味のあるものだった。



Q2

これまで経験してきた仕事は私のキャリアのゴールを実現するための良い機会を提供してきた。

